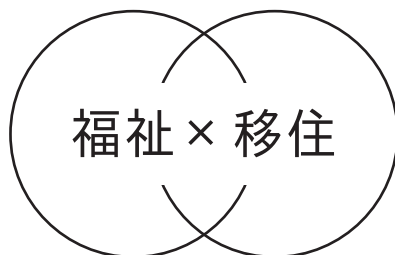



地域課題の解決につなげる  
ネットワーク事業 2020



# 「物語」で 未来を 構想する

「福祉 × ○○ × 移住」の  
関係の結び目を編むために



# contents

---

- 1** プロジェクトの背景  
地域の未来を「福祉 × ○○ × 移住」で構想するために

---

- 2** ガイダンス 2020年9月30日（水）  
「福祉 × ○○ × 移住」の可能性とは

---

- 3** 第1回 2020年10月12日（月）  
「福祉 × ○○ × 移住」のエッセンスを探る

---

- 4** 第2回 2020年10月28日（水）  
「福祉 × ○○ × 移住」実現のために：「物語」で未来を構想する

---

- 5** 第3回 2020年11月11日（水）  
自身の「物語」を書く

---

- 6** 第4回 2020年11月25日（水）  
お互いの「物語」を重ねる

---

- 7** 2020年12月～未来へ  
ワークショップで生まれた物語と今後の展望

---

# 1

## プロジェクトの背景

地域の未来を「福祉×〇〇×移住」で構想するために

### 「福祉×〇〇×移住」プロジェクトについて

本レポートは、令和2年度岐阜県移住促進団体活動推進事業委託の「福祉×移住による地域課題の解決につなげるネットワーク事業2020」の活動をまとめたものです。

岐阜県では、人口減少社会においても地域が活力を保ち続けるため、「清流の国ぎふ創生総合戦略」において、令和元年度から5年間で7,000人の移住者を呼び込むことを目標のひとつとし、移住定住対策の取り組みが進んでいます。

移住定住をさらに進めていくために、これまで各地域で取り組まれてきた事例の課題と解決策などを共有し、他地域へ波及させていくことが必要です。

そこで、地域のくらしと共にある「福祉」という分野が、移住者を呼び込む有効なプラットフォームになるのではないか。移住者と地域のあいだをつなぐ「関係の網の目」になれるのではないか。そうしたおもいから「福祉×〇〇×移住」のプロジェクトは生まれました。

### 人材確保と移住政策とのあいだを福祉がつなぐ

そもそも、このプロジェクトは「福祉人材確保と移住施策はどうしてバラバラなのか」という問いを出発点にスタートしました。

人口減少が進む昨今では、人材不足が課題となる業界や、働き手不足に悩む地域が少なくありません。一方で、在宅勤務やリモートワークなどの働き方の多様化により、UターンやIターンといった新しい働き方の需要が高まっています。しかし、福祉と移住は互いの業界を知る機会が限られており、両者のあいだには大きな溝があるのが現状です。

こうした課題を受け、2018年度と2019年度には「岐阜で暮らし働きたくなる福祉のシゴトの魅力発信事業」を実施しました。福祉の中には介護以外にも農業や製造業など多様な雇用機会の可能性があることや、岐阜県外での移住の取り組みを紹介。福祉と移住の親和性や、「福祉×移住」という可能性を県内外に伝えるうちに、単なる事例の理解にとどまらない、新たなプロジェクトや実践につながるワークショップの必要性が高まってきました。

## 参加型・対話型ワークショップで未来の物語を書きあげる

そこでこのプロジェクトでは、「福祉×移住」モデルをご自身の仕事や地域にいかしてもらいたい、というねらいから、参加者を含めた「福祉×〇〇(参加者)×移住」という、参加型・対話型のワークショップ(ガイダンス含め計5回)を企画・実施しました。

実践やこれからにつなげるためにも「参加・対話」を重視し、各回のワークショップ後半にはチャットでの感想や質疑応答の対話の場を設け、「福祉×〇〇(参加者)×移住」の可能性をゲストも一緒になって考えるダイアログ仕立てで構成しています。地域や業界を超えた関係づくりのために、ワークショップは全てオンラインで開催しました。

岐阜県を中心に、東京や千葉、和歌山や沖縄などから、福祉や移住、医療、金融、NPO支援など、

多様なバックグラウンドを持った約25名が集い、最終的に7名の方から「福祉×〇〇×移住」の未来の物語が誕生。さらに、お互いの物語を共有して重ね合わせることで、具体的なプロジェクトのパートナー関係がうまれた場面もありました。

このレポートでは、ガイダンスを含め計5回のワークショップの記録とともに、参加者のチャットや対話の一部も記録をしています。単なる報告書にとどまらず、レポートを手にとられているみなさんが、少しでも「福祉×〇〇×移住」プロジェクトの可能性を感じただけいたら幸いです。よろしければ、こうしたプロジェクトに関心のある身近な方にもご紹介くださいませ。

このレポートを手にとられたみなさんから、  
新しい「関係の網の目」や「未来の物語」がうまれることを願っております。

「福祉×〇〇×移住」プロジェクトにご興味やご質問などありましたら、お気軽にご連絡ください。

社会福祉法人いぶき福祉会  
北川雄史  
TEL:058-233-7445  
E-mail:yuji.kitagawa@ibuki-komado.com

# 2

## ガイダンス 2020年9月30日(水)

「福祉 × ○○ × 移住」の可能性とは

### 概要

日時	2020年9月30日(水) 19:30-21:00 ※(Zoomによる)オンライン開催
ゲスト	柴原孝治(岐阜県白川村 一般社団法人 ホワイエ代表)
進行	平田直大(沖縄県 一般社団法人しまのわ代表)
スピーカー	北川雄史(岐阜県 社会福祉法人いぶき福祉会専務理事) 森田直広(沖縄県 波と風と合同会社代表)
参加者	29名
ねらい	・当プロジェクトの趣旨と「移住×○○×福祉」の可能性を考える。 ・ゲストの柴原さんの地域づくりの話をもとに、福祉や移住を通じた地域での課題解決の可能性を検討する。



柴原



平田



北川



森田

ガイダンスの冒頭では、プロジェクト発起者の北川さんから、プロジェクトの背景について主に福祉の視点から紹介。続いて沖縄で移住や地域おこしに携わる森田さんと、「福祉×移住」という観点でのダイアログをおこないました。

### きっかけは、地域の暮らしに携わる「福祉の現場」から

北川雄史さん(以下、北川):

みなさん、お集まりいただきありがとうございます。Zoom越しでお集まりの顔ぶれをみて、これから面白いことが始まるなど期待が高まっています。まずは今回の「移住×福祉」のプロジェクトを考えるようになったきっかけの話におつきあいいただければと思います。

私は岐阜市のいぶき福祉会(以下、いぶき)で障害者福祉に携わっています。いぶきでは

「いのち」や「暮らし」をキーワードに、約150名の障害のある人と一緒に過ごしており、就労継続支援や生活介護、デイサービスなどを通じて、生き生きと暮らしていける地域社会の実現を目指しています。活動を続けている中で、2017年のある日に、ふと「なぜ福祉の人材確保と移住施策がバラバラなんだろう」と疑問が浮かびました。福祉の仕事は介護だけでなく、マネジメントや

デザインもあれば、農業やパン屋など様々で、多くの雇用機会がある。ならば県外から人材が集まれば、それは「移住」といいのではないかと。

**平田直大さん(以下、平田):**

既存の縦割りの見方を取り払い、「福祉」と「移住」を一緒にできないか。

ここがスタートだったのですね。

**北川:**

福祉は、地域の暮らしと人々のつながりのプラットフォームであり、テーブルクロスのようなイメージを持っています。例えば「農業をやりたい人」にとって、一人で新しく農業を始めるというやり方もありますが、すでにある福祉の中で農業と一緒にやれば、活躍の場もあるのではと考えました。

そこで、2018年度と2019年度に「岐阜で暮らし働きたくなる福祉のシゴトの魅力発信事業」を実施し、ワークショップを通じて、福祉の仕事の多様なあり方や福祉と移住の親和性について、福祉以外の人に知ってもらうための場づくりに取り組みました。

この活動をしていく中で、ただ学ぶだけでなく、具体的なプロジェクト案の作成と実践まで含めたワークショップの仕立てが必要と考え、今回のプログラムを考えました。



**地域で出会った人々の暮らしをかたちにするのが福祉**

**森田直広さん(以下、森田):**

私は沖縄の離島コミュニティの中で、社会福祉士や看護師の移住・定住のサポートに、地域の方々と取り組んできました。

少し話を戻しますが、農業やものづくりの事業は、どうして福祉で実現できているのでしょうか？お茶をつくること自体、そもそもかなり難しいことだと思います。

**北川:**

人と出会うところにモノは生まれます。障害のある方にできることは何か。その場でこうしたことができないか。農業もパン屋もこうした出発点から生まれました。

もちろん、福祉の中で事業成立させることで、つぶれないようにする工夫もあります。「農業で食っていけるかわからない」といった心配がいらぬ点で、福祉はまず安定しています。

**森田:**

出会った方々の暮らしをかたちにするのが福祉。これが基盤となっているから、例えば「農業なら自分のからだでこういうことができる」といった個々の可能性を広げていけるのですね。移住という視点で、いぶきでは県外から移住した方で活躍されているケースはあるのでしょうか？

**北川:**

実は、僕も含めていぶきの職員の約半分は県外から来ており、管理職の4名も全員県外出身です。いぶきのメンバー自体が地域完結していないことが、全国のネットワークを感じながら働く文化を創っているのかもしれない。



つづいては県外から岐阜県白川村へ移住し、現在、地域おこし協力隊やまちづくり事業、カフェ経営などを続ける柴原氏が登場。移住者としての「地域×移住」の取り組みについてお話いただき、福祉と移住との関係まで対話がひろがりました。

## 移住者という「外」からの視点 だからこそ動けることがある

柴原孝治さん(以下、柴原):

私は4人家族で7年前に白川村へ移住しました。以来、地域おこし協力隊や、アオイロ・カフェの経営、県の移住・定住コンシェルジュ、地域と行政間の中間支援を担う一般社団法人ホワイエの代表などをやっています。

北川:

柴原さんも共感くださると思うのですが、時々「北川だから『福祉×移住』のような今までにないことができるんや」と言われることがあります。でも、そんなはずはないですよね。柴原さんのキャラクターだからできる部分とそうでない部分などはあたりしますか？

柴原:

個人としてというより、**移住者だからできることを**やっている、という感じですね。

白川村は人口が約1,600人で高校から外へ出ていったきり20代が帰ってこないという課題を抱えています。そうした問題を解決するために、例えば、地域に面白い学びの場を増やしたいという思いから、魅力ある生き方や働き方を考える方に多様な対話の場を提供するソーシャル大学「白川郷ヒト大学」を設立したり、事業者と学生のインターンのマッチングなどを行っています。

私自身が移住者だからこそできる、「関係人口」を増やす取り組みがあるのではと考えています。

## 若者を仲間に、地域の可能性を 広げていく

森田:

学生との取り組みが特に多いようですが、その理由は？

柴原:

**白川村という地域に閉じないため**、という点が大きいです。

移住者とはいえ、もう7年経つうちに「よそ者」から「村民」へ移っていきます。それだけ関係が深まったといえるのですが、一方で「よそ者だったからこそ言えたのに」ということも出てきました。

それに対して、学生は何色にも染まっていないから素直に思ったことが言える。私が直接言うよりも、学生に記事にしてもらったり語ってもらった方が地域に伝わることもあります。

森田:

**自分だけではなく、若者も仲間に入れて一緒に語る**ということですね。インターンそのものが移住促進となっているかと思いますが、移住者が白川村を選ぶ理由はあるのでしょうか？

柴原:

大事にしている考えは「地域が面白そうだと思ってくれる」こと。学生はすぐに「移住者」となることはあまりないのですが、ここでの経験が種となって、戻りたくなる地域になっていく。一朝一夕では変わりませんが、そうした実感がありますね

## 「福祉 × 移住」というよりむしろ「福祉 = 移住」!?

**平田:**

つづいて、移住と福祉とをつなげて考えてみたいと思います。柴原さんからみた福祉の可能性はありますか？

**柴原:**

「福祉 × 移住」というより「福祉 = 移住」、つまり福祉が移住の可能性そのものなのでは、という印象を持ちました。

事前の打ち合わせでは、「移住は実体がなく、福祉は具体的」という印象でしたが、北川さんが「福祉 × デザイン・パン屋・農業」という事業をやられているという話がありました。この「福祉」の部分「移住」に変えてもきっと通じます。

デザインのできる人がいれば村で働けるし、パン屋の技術があれば地域でお店もできる。それはマネジメントでも農業でも同じ。

先ほど「暮らすを形にするのが福祉」とありましたが、移住サポートも「暮らすを形にすること」。いずれにしても、もはや福祉は僕らの概念を超えていて、移住と同義だということまでできました。

**北川:**

移住者が「この村でデザインの仕事を生かさないか」と考えたときに、「福祉の場面でもデザインのスキルを生かします！」という可能性を知ってもらいたい、というのがこのプロジェクトのスタートでもありました。

今は岐阜の人として語っていますが、よくよく考えてみると私は京都出身で、実は岐阜県への「移住者」なわけです。

## 既存の業界・業種の枠を超えた「地域密着の役割」としての福祉

**北川:**

福祉にはもちろん業界・業種としての意味合いもあります。ただ、別の側面として福祉には人と地域の接着剤・受け皿の役割もある。この点は、移住とまったく一緒だと見ています。「福祉 = 介護」と狭くとらえられてしまうこともあります。実は「安定している」「知らないうちに地域に入っていける」「いい人だと思われやすい(笑)」など、いいことだらけだということ強調したいですね。

**森田:**

沖縄では移住サポートをしていると、移住者が地域に入るハードルがどうしても高くなるため、福祉が地域の入り口になれるのではないかと思います。いぶきさんのように、「福祉 × 移住」で考えることが既存の社会福祉法人の可能性を広げることになるのでは？

**柴原:**

業種ではなく「役割」としての福祉に可能性を感じます。「役割」として福祉の業界にいるから地域に入りやすくなり、あいだもつながりやすくなり、結果として地域にも還元できる。いぶきの取り組みが持続可能なまちづくりにもつながっているように思います。

**北川:**

いぶきでは茶畑を地域からお借りして使わせてもらっているんですが、地域側からすると、こちらの世話をしているようで、実はそのおかげで地域が恩恵を受けている。

この微妙な心理が、地域と移住者のハードルをこえていく図式なのだと思います。その中で自然と「おはよう」「お互いさま」「ありがとう」「おかげさま」というコミュニケーションが増えて、おおらかさが地域に生まれ、ますます暮らしやすくなっていくわけですね。



## 移住者よりも、地域と人のあいだをつなぐ「担い手」を

**平田:**

学び合える関係が移住と福祉には多そうです。今まで可能性を見てきましたが、一方で移住がなかなかうまくいかない地域もありますよね。

**柴原:**

現状では、**地域と移住者のあいだをつなぐ覚悟のあるキーパーソンの有無**が大きいように思います。全国で移住が成功している地域を見てみても、例えば地元での行政職の任期後にそうした役割を担う、といったケースも多いようです。

**平田:**

福祉に当てはめるといかがでしょう？

**北川:**

福祉は本来どこにもある仕事ですが、イメージが地域の色よりも「介護」「長時間労働」といったイメージが先行して地域と切り離されがちです。最近もある看護師の方と話をしたのですが、福祉の中に看護師のニーズがあることや、短時間でも働けることをご存知ではありませんでした。こうした既存のイメージを超えた見方で、仕事の魅力を感じられる人を増やしたいと考えています。例えば、柴原さんのような移住の方と僕のような福祉の人が連携したり、窓口が輻輳化しながら重なっていくことが大切になりそうです。

**柴原:**

北川さんはこれまで岐阜に呼んだ方は「転職者」であって、おそらく「移住者」にカウントされていないですよね。地域によって移住者の定義やカウント方法が違うので、もはや、移住という切り口だけでは移住の全体像が見えにくくなっているのかもしれませんが、「福祉を通じて移住者が増えています」ということを明らかにするだけでも、福祉と移住の可能性がますます広がりそうです。

**北川:**

新型コロナウイルスの状況などもあり、**移住者というより「担い手」を増やしたい**という思いがあります。色々な人の**安心安全を考えたときに、エッセンシャル・ワーカーとして担い手をどう確保するか**。そのためにできることはしておきたいと考えています。

CHAT!

**星野 晃一郎さん**

(東京・ダンクソフト)

地域に深く関係していこうとする場合、真正面から行くとよそ者としてぶつかる方が多いけれど、「移住×福祉」の観点で地域の人と同じ困りごとで同じ未来へ視点が向けられるのはとても大事なと気づきました。子育て、介護を話した方が、BCP(事業継続計画)などよりは伝わりやすいですね。

「自分は移住先でこうしたい」とうだけではなかなか地域との関係はつくれませんが、すでにたくさんのタッチポイントがある福祉を通じて暮らしを共にすれば、地域の受け入れられ方が違いますよね。

**柴原**

**金丸 泰子さん**

(東京・作業療法士)

業界の外へ意識をむけている福祉法人は多くない印象があります。外へ開く必要を感じていなかったりするのでしょうか？

福祉にとって「移住」というと距離を感じるかもしれませんが、「人材不足」という視点で重ねると、移住が「担い手不足」の解決の糸口になるかもしれません。従来型の業界の枠組みではなく、「福祉×移住」というあいだをつなぐ見方によって新たな可能性が生まれそうです。

**北川**



# 3

## 第1回 2020年10月12日(月)

「福祉×〇〇×移住」のエッセンスを探る

### 概要

日時	2020年10月12日(月)19:30-21:00 ※(Zoomによる)オンライン開催
ゲスト	伊東将志(三重県尾鷲市 夢古道おわせ支配人)
進行	平田直大(沖縄県 一般社団法人しまのわ代表)
スピーカー	北川雄史(岐阜県 社会福祉法人いぶき福祉会専務理事) 森田直広(沖縄県 波と風と合同会社代表)
参加者	25名
ねらい	・ゲストの伊東氏の実践されている田舎に人が集まる仕掛けのお話を通じて「移住×〇〇」の可能性を考える。 ・北川さん、森田さんとのクロストークで「×福祉」の可能性を深掘りする。



伊東

はじめに、プロジェクト発起者の北川さんから、改めてプロジェクトの紹介がありました。

### 福祉というテーブルクロスで色々な人が結びつくパーティーを

#### 北川:

これまで「福祉×移住」をテーマのプロジェクトをやっていく中で「どうして福祉の人が移住をやるの?」という声がありました。簡単に申し上げると「同じ地域のことなのに、なぜ福祉と移住がバラバラなのか」という問いがスタートでした。

地域でくらす一人ひとりがもっと幸せになる取り組みをする。その意味で福祉も移住も同じ。それならば、福祉も移住もよそから人が来たりする受け皿になるのではと思いはじめた。

ですから、これを福祉のプロジェクトというよりも、もっと色々な人が色々な役割を描けるようにしたいですね。福祉というテーブルクロスをかけることで、色々な人が結びつく

パーティーをできればという思いで一緒にいただければと思います。

続いて、夢古道おわせ支配人の伊東さんが登場。生粋の尾鷲っ子という伊東さんは、高校卒業後、ほとんどの友人が尾鷲を離れることを知り、尾鷲に残ることを決めたといいます。山林が9割をこえ、ロケーションも決して便利ではない中での、地域活性化の取り組みや可能性を伺いました。

### 地元のお母さんたちが活躍できる場を

#### 伊東将志さん(以下、伊東):

高校卒業後、尾鷲の商工会議所に就職をしたのち、2007年から夢古道おわせの運営と経営を続けています。ここには地元のお母さんがランチバイキング形式で地元の料理を提供しており、過去に農林水産大臣賞も受賞しました。尾鷲の人がずっと食べてきたものを料理してきたのは、尾鷲のお母さんたちで

すから。  
そのほか、お母さんたちにむけた起業や事業展開の支援も行っていきます。

平田:

地元の方と共に地元に根付いた活動をされているのですね。

伊東:

今では6つ目の起業チームが動き出しています。テレビでも放送され、若い子も増えています。平均年齢70代のお母さんがバリバリ活躍しています。

## 売れない間伐材が「ありがとう」をつなぐ全国企画に

伊東:

また、尾鷲の課題のひとつに、ヒノキの間伐材の活用がありました。世界遺産の熊野古道の森からのヒノキですが、細い木は販売もできず困っていました。

そこで、売れないヒノキを9センチに伐採したものに「ありがとう」のメッセージを添えてお風呂に浮かべる「100のありがとう風呂企画」を考えました。

もともとは夢古道の湯で始めましたが、これまで全国の500もの温浴施設が企画に賛同してくださっています。

お風呂に浮かぶヒノキと「ありがとう」のメッセージとともに、尾鷲の森を守っている人の誇りを伝えられていたら嬉しいです。

北川:

そもそもどのようなきっかけがありましたか？

伊東:

間伐によって水害が起こらない豊かな森を守りたいというのが出発点ですが、そのことは前面に出さずに何かできないかと考えました。

この企画の背景には、インターンので参加した大学生の活躍があります。

2012年に新規事業長期実践型インターシップ事業をしたのですが、そこでわかったのは、素敵な企画を考えて募集をすれば、場所や年齢を問わず素敵な人が集まる、ということ。2014年には地域おこし協力隊中間支援事業も始めました。

## 人材不足に悩む地域と働く理由に悩む人を結ぶ

森田:

地域の外の方が活躍できる場を共につくりていくイメージでしょうか？

伊東:

はい。近年、学生に限らず「何のために働くのか？」という疑問を抱く大人も増えています。新型コロナウイルスの流行になってますますその傾向がありますよね。

そのため、「地域から求められて働きたい」という人が増えているように思います。

最近では「夢古道的兼業のスズメ」として新しい働き方の試みも始めています。

例えば、ゴールデンウィークの時期は、お店からすると人手が欲しい。一方で尾鷲に関心のある人の中には、そこで働いてみたいという方がいます。そこをつなぐ。好きな町に旅して働いて、そのお金でますますその旅を楽しむ。色んな問題も楽しく改善していく。本当に変えようというところをあえて前面に出さず、別の切り口で差し出すことが大切だと考えています。

## 他の人が仲間に入れる余白を

平田:

ここからは「移住」と「福祉」を重ねて深掘りする時間にしていきたいと思います。

北川さんはいかががでしょうか？



**北川:**

「課題解決」はあちこちでいわれていますが、だいたい悲壮感が伴っています。伊東さんのところでそうならないのは、きっと課題や問題に対して、新しい価値や新しい文化の可能性をみているからではないかと思いました。

**伊東:**

これまで尾鷲のために模索していく中で、成功事例をたくさんつくることよりも「何かに向かって挑む姿勢」をみせる方が、仲間がたくさん集まることが分かってきました。あとは「余白」ですね。物語の脚本は書くけれど、演じるのは自分ではなくていい。

**北川:**

先ほどのスライド資料にもダウン症のメンバーがいらっしゃいましたが、伊藤さんは、障害者にとって「僕らでも担える」「僕らが入ることかえってこういうこともできる」という可能性を描いているように思います。

**平田:**

話を聞くほど、地域と福祉がひとつなぎになっていきますね。そして「余白」があるからいろんな仲間が集まってくる。

**伊東:**

ですから、時には私のやっていることに1ミリも興味もない人にヒアリングもします。こうして言葉はとにかく時間をかけてつくっています。深く考えて生まれた言葉には、にじみ出て伝わるものがあると信じています。

**森田:**

地域創生や地域活性を掲げるだけでは伝わらない。地域の誰もが活動に興味を示したり賛同してくれるとも限らない。伊東さんの言葉からは、興味がないような人との対話まで徹底したからこそ伝わる想いがあるのでしょうか。

**福祉と移住の共通点を「おでん」に見立てると****平田:**

「コロナ禍で何か新しいことを試みているのですが、一度始めるとそれを2、3、4…と伸ばし続けられることを求められます。伊東さんは最後まで何をしていくかというビジョンはあるのでしょうか？」と質問が届きました。いかがでしょうか。

**CHAT!****瀬瀬 正浩さん**

(岐阜・障害者支援)

私は、伊東さんがベンチャーのように新しいものを生み出すのとは対照的に、サラリーマンチックな仕事はしていますが、共感したのは「仲間」でした。一緒に共感する仲間が集まってハッピーな状態が感じられればいいんじゃないのかと、私も感じています。

いい物語には、仲間がいて喜怒哀楽が入っていないとダメだと思うんです。挫折や失敗も、叶わない夢もあったがそれを上回る喜びがある、といったように。なぜなら、そこに仲間と共に乗り越えたり立ち向かったりする姿があるからです。だから成功例ばかり並べたものを、薄っぺらく感じるのかもしれない。

**伊東****魯 慈忍さん**

(岐阜・障害者支援)

実家のお寺に年々人が寄らなくなってきて、地域の憩いの場として、なんとかかせなあかんと思っています。伊東さんの伝える言葉は、時間かけて考えると、上っ面じゃなくて本質にせまっていく。関係なさそうな人にまでヒアリングしていく姿勢に刺激をうけました。

今でいうコミュニティづくりはもともと「寺」や「寺子屋」がやってきたこと。ですから、「そもそもコミュニティづくりは自分がやってきた」という感覚でやっていただければと思います。

**伊東**

**伊東:**

ほぼないです。むしろ思うようにならないことを前提に考えています。伊東将志の物語があるのなら、それは常に書き換えられ、更新され続ける物語だと考えています。

**北川:**

そもそも障害があることはダメなことなんだと思われがちです。でも、世の中みんなが新型コロナに向き合うことになってはじめて、生きづらさは、障害があるとかないとかいうことではないのかもしれない…と、気づき始めたんじゃないかと。

**森田:**

これまでの話を伺っていて、福祉と移住の共通点は「おでん」だと思いました。どちらも個々の素材が際立っていて、みんなが浸っている出汁を各々の具材が吸収して、さらに自分の味をおいしくしている。そうした個とコミュニティの関係の可能性を、福祉や移住にみた気がします。

**平田:**

ロールキャベツ(移住者)のような新しい具材が入ってきた後、ロールキャベツからも実はいい出汁がでていて、古参の大根(地元の人)をおいしくしている。そういう移住のプロセスがおでんにも近いのではないかと。

**伊東:**

「出汁」が大事ということですね。どんな具材のよさをも引き出せる出汁のような。

**森田:**

北川さんのお話にあった「福祉のテーブルクロス」のイメージにも通じるものがありますね。

ガイダンスのクロージングに、北川さんと平田さんが今後のワークショップと物語について話しました。

**なぜ物語が必要なのか****平田:**

伊東さんには、これまでに別の場でもお話をしてもらっていますが、集まる人やテーマ設定によって、また違った広がり方があると感じました。みなさんとの対話で深まっていくプロセスが興味深かったです。「福祉×○○×移住」という観点や物語の観点でも包括いただきたい時間だなと感じました。

**北川:**

なぜ物語が必要なのか。なぜ物語は人をひきつけるのか。物語には構造があります。その辺りを体系的に理解いただいた上で、3・4回目で物語を書き、さらに他の物語を読んだり対話をする。そうすることで、自分が物語を書いているけれど、他の人と共に物語が動いていくような、そんな経験をしていく時間にしてもらいたいと思います。





# 4

## 第2回 2020年10月28日(水)

「福祉 × ○○ × 移住」実現のために：「物語」で未来を構想する

### 概要

日時	2020年10月28日(水)19:30-21:00 ※(Zoomによる)オンライン開催
進行	平田直大(沖縄県 一般社団法人しまのわ代表)
スピーカー	北川雄史(岐阜県 社会福祉法人いぶき福祉会専務理事) 森田直広(沖縄県 波と風と合同会社代表)
参加者	18名
ねらい	・未来を構想するために、なぜ「福祉×○○×移住」に物語が必要なのか、物語とはどういうものを改めて考える。 ・その前段階として、物語を充実させるための「第3カーブ・ビジネス」といった世界の見方や、「本来のマーケティング」、あいだの知の担い手「インターメディアエーター」などに触れる。ダイアログを通じて、ご自身の仕事などと重ね合わせながら理解を深めていく。

これまで2回にわたりゲストをお招きし、福祉と移住の共通点や「福祉×○○×移住」の可能性を考えてきました。ここに物語がどう関係してくるのかに参加者の関心が動きはじめてきた今回は、平田さんによるレクチャーから始まります。

### より豊かな物語のために、世界の見方を考える

#### 平田：

もともとご案内していたのは「物語」ですが、その前に、まずはみなさんの「世界の見方」について一緒に考えていきたいと思えます。というのも、どのように世界をとらえていくかをまず考える方が、みなさんの物語をより豊かにできると思うからです。

そこで今回は、新しい「世界の見方」を知っていただいた上で、物語がどういう構造なのか

を最後に触れます。次回以降、実際に物語を書いていくプロセスに入ります。

この後、実際のワークショップでは、「ビジネス・パラダイムの転換」「第3カーブ(開かれた対話と創造の場)」「本来のマーケティング」「あいだの知の担い手“インターメディアエーター”」などについての話がありました。

一方的に物を造って売る「第1カーブ」ではなく、生活者のニーズを感じ取って対応する「第2カーブ」へ、さらにこれからは、多様なプレイヤーが「開かれた対話と創造の場」によって、網の目のように関係を生み出す「第3カーブ」へとパラダイムが転換していく。こうした多種多様な人との結びつきのあいだに立つのが「インターメディアエーター」であり、「物語」がますます求められていくということです。

(こうした「世界の見方」について、ご関心のある方はお問い合わせください)

続いて、身のまわりにある第1カーブ、第2カーブ、第3カーブの事象について、シェアしました。

## 3つのビジネス・パラダイムで仕事や身の回りの事象をとらえ直す

### 北川:

福祉は、多様な人が集まる地域をフィールドにしています。こうした網の目の中に私たちが本当にやりたいことがあるように思います。その点で第3カーブと親和性が高いですね。

### 森田:

現在、海ぶどうの養殖をやっていますが、「造って売る」という第1カーブの観点では、すでに養殖業者は飽和状態です。そこで海ぶどうをどう売るかではなく、例えば海ぶどうの売上を使って併設されているビーチで海の体験をしたり、キャンプをする、といった「+α」を提供していこうと考えています。

### 平田:

自分の商品だけでなく、多様なアクターが参加できるよう、第3カーブ的にビジネスをつくっていききたいというイメージですね。

### 金丸泰子さん(東京。以下、金丸):

作業療法士というリハビリテーション職にありますが、現在は第2カーブ的というか、障害のある人の症状を感じ取って、リハビリテーションを提供しています。

今友人と考えているのは、こちらが与えるだけでなく、その人のやる気を促して主体的に動ける、ピオトープのような場を考えています。

### 北川:

ピオトープは多様性の象徴ですし、網の目状の第3カーブのようです。

### 平田:

ここで金丸さんのお仕事で3つのビジネス・パラダイムを整理すると、「あなたの課題はこれです」と指定するのは第1カーブ的。「あなたの課題はなんですか？」からスタートするのは第2カーブ的。

第3カーブでは、それぞれが持ち出すことで生まれる「関係の網の目」によって解決されていく。医療などでは、不自由さが課題かもしれないけれど、本来は支援する側にも色々な課題があるはず。それらを共に解決していくような「開かれた対話と創造の場」が第3カーブ的であると思います。

### 堀部智子さん(岐阜・生活協同組合。以下、堀部):

生協は最初から第3カーブでした。その意味で最先端を行っている意識はあります。

ただ、生活者の声を聴いて商品の取り扱いを増やすという意味では、第2カーブ的な面もあるように思います。

### 牛丸基樹さん(愛知・福祉。以下、牛丸):

福祉がやってあげる、やってもらうという関係ではないのは、私が強調していることですが、もともと第3カーブの考え方にずっとありながら、実際にはなかなか具現化していない印象です。

### 平田:

実践されている方のコメントはやはり重く分厚いですね。3つのビジネス・パラダイムのイメージが広がったようで嬉しく思います。

### 北川:

この3つのカーブは重なり共存していますから、第3カーブ型でプロジェクトを行っていても、簡単に第2カーブに転落もするし、第1カーブ的なことも頻繁に起こっています。だからこそ、このビジネス・パラダイムに意識的であり続けることが大切になります。

ここからはいよいよグループワーク。ご自身のプロジェクトや事業と第3カーブ（「開かれた対話と創造の場」）を重ね合わせると、どのようなイメージが湧くのか？ブレイクアウトルーム（メンバーを任意の小部屋に割り当てる、Zoom上の機能）に分かれてグループ・ダイアログを経て、最後にグループごとに発表をしました。

## 第3カーブを通じてプロジェクトのこれからを考える

### 平田：

それぞれグループごとのダイアログはいかがでしたか？

### 瀬瀬 正浩さん(岐阜・障害者支援。以下、瀬瀬)：

私は長い間、建設業で第2カーブ的な営業職をやっていました。その当時、時代の寵児のように売上があげた人がいましたが、その人は地主だけでなく町の人とも完全に打ち解けていて、今日の見方では、当時から第3カーブのビジネス・パラダイムで活動していたのだなと気づきました。

### 金丸：

ご一緒したおふたりのパワーに圧倒されっぱなしでしたが、みなさんが、自身でやってきたことを振り返るだけでなく、次にどうするかを話されていて素晴らしいなど。

こうしたメンバーと日々を過ごしていくことが「開かれた対話と創造の場」なのだなと思いました。

### 牛丸：

実際に頑張られている話を聞くと勉強になるし、楽しいですね。

最後に辻本隆太さん(岐阜)が取り組まれている庭づくりで、近所の方との関係づくりに悩まれているお話などは勉強になりました。

### 森 俊介さん(岐阜・金融。以下、森)：

みなさんすでに実践しているなど。印象に残ったのが、いぶき福祉会でデザインをされている山本友美さんのお話でした。

障害の度合いは様々という中で支援員はできることを丁寧に拾い上げて見つけているとのこと。これは第2カーブ的ですが、地域に出向くことで、地域や利用者から「こうやってほしい」「こうしたい」といったアイディアが出てきて、対話や相互作用がうまくまわっているという話は、第3カーブ的だと感じました。

### 平田：

ありがとうございました。このダイアログが、まさに「開かれた対話と創造の場」だったと思います。みなさんにはその実践をしていただきました。新しい発見やこれまで気づかなかったこともあったのではないかと思います。

実際のワークショップでは、この後「物語」の概要と、物語に共通する「3つの構造」について話がありました。

## 移住も福祉も新しい物語をつくっていくこと

### 平田：

これまでのワークショップで、ゲストと北川さんや森田さんとの対話によって、福祉と移住の新しい関係が見えてきたように、新しい出会いが新たな物語を生み出します。

新しい人が移住をしたり、福祉に仲間が加わるというのは、それ自体が新しい物語をつくっていくことに他なりません。

とするならば、物語によって新しい場や「関係の結び目」を生み出すことができるということ。

今回は物語の入り口の話までとなりましたが、次回、いよいよ本格的に物語をつくっていただきます。

#### 森田：

ブレイクアウトルームでは、直接お会いしたことがない方ばかりなのに、対話をした時に既に近い印象がありました。いい方々が集まっています、これから生まれる物語が楽しみです。

こうしたことって、だれとやるのが大切だと思っていました。

自分の物語を書くって、気恥ずかしい部分もありますよね。ですから、ちょっと恥ずかしいことも言えそうだな、と思える方と一緒に物語を書けることは、想像以上にありがたいことだなと。

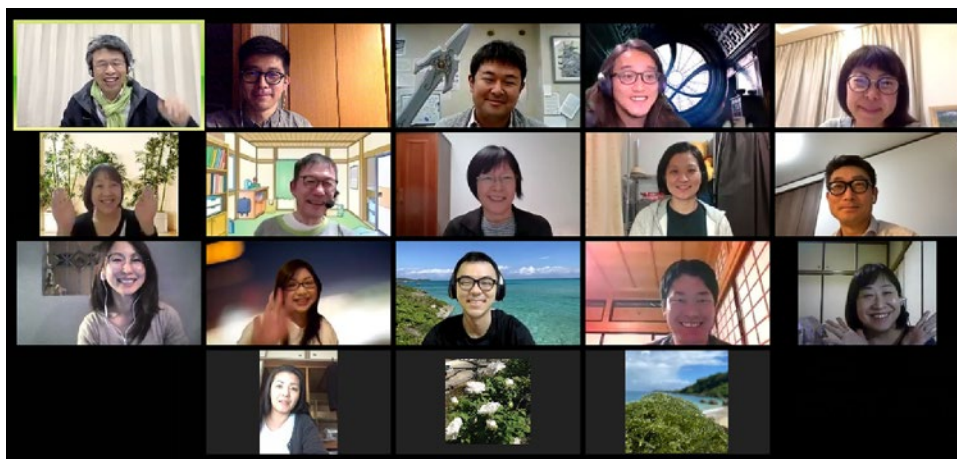
#### 北川：

すでに3回のワークショップが終了となりますが、同じ話を積み重ねているからこそ出せる言葉があると思っています。

ここで、みなさんのような多様な方々とのそうした関係が少しずつ育まれていくことが魅力的で、やってよかったなと思っています。

平田さんの進行や対話も心地よく、このワークショップのあり方自体に、第3カーブ的な可能性を感じています。

また次回、みなさんとご一緒できるのを楽しみにしています。





# 5

## 第3回 2020年11月11日(水)

自身の「物語」を書く

### 概要

日時	2020年11月11日(水) 19:30-21:00 ※(Zoomによる)オンライン開催
進行	平田直大(沖縄県 一般社団法人しまのわ代表)
スピーカー	北川雄史(岐阜県 社会福祉法人いぶき福社会専務理事) 森田直広(沖縄県 波と風と合同会社代表)
参加者	17名
ねらい	・未来を構想する「物語」の3つ構造の理解を深める。 ・「物語のフレームワーク」を用いて、おもいを物語にする。

ガイダンスを含めると、この場に参加者が集うのは4回目。Zoom上の参加者の表情も「また会いましたね」というような親しげなものになってきました。今回から、本格的に物語づくりに取り組んでいきます。まずは物語レクチャーからワークショップが始まりました。

### 第3カーブと物語の関係

平田:

今日はまず30~40分ほど物語についてお話をします。どうぞリラックスして聞いてください。その後に、みなさんに実際に物語を書いていただきますので、お手元に紙とペンなどをご用意ください。

実際のワークショップでは、この後、前回の振り返りを経て、第3カーブと物語がどのように関係しているのかに触れ、第3カーブの時代において物語がプロジェクトを前に進める上で鍵となる、などの話がありました。

その上で、物語は、「時間的に離れた複数の出来事を”始め・中間・終わり”という時間的秩序に沿って組織化する言語行為」であり、「物語の基本構造は、加害 or 不足に始まり、それらの回復・充足というかたちをとる」のであり、

- 1…出発(Separation)
- 2…試練(Initiation)
- 3…帰還(Return)

の構造でできていること、それぞれについての詳しく説明がありました。(物語について、ご関心のある方はお問い合わせください)

### 物語の3層構造と3つの側面

平田:

少し整理します。物語には、3層の構造(出発、試練、帰還)と3つの側面(越境、秘法習得、再生・再創造)があります。

まず、なにかしらの不足を抱えた物語の主人公は、その解消のために従来の世界を「出発」

し、異質の世界へと「越境」します。そして、不足の充足のために「試練」を乗り越え、不足を満たすための「秘法習得」をし、従来の世界へと「帰還」。最後には不足も解消されて「再生・再創造」へ至ります。ここまでのポイントをおさえると、少なからず物語が書けそうな気持ちになってきたのではないのでしょうか。

続いて、さらに「物語の構造」について、参加者のみなさんと理解を深めました。そして、いよいよ、ワークショップへ。一人ひとりの物語づくりがはじまります。

## 「移住」と「越境」を重ねて物語を書く

平田:

ここからは、これまでお話した物語の構造を意識して、ご自身の物語を考えていただきたいと思います。今日はお試しのエクササイズになりますので、気負ったり、いい物語をつくろうと思わなくて大丈夫です。

物語を書くにあたっていくつか注意点です。まず、内容はみなさんが抱えているプロジェクトや事業に限定してみましょ。次に、過去ではなく、未来の物語を描いてください。そして、物語のフレームワークを使って書いてください。

ちなみに、フレームの中で「越境」をハイライトしているのにはわけがあります。というのも、「越境」こそが、今回のワークショップのテーマの「移住」と密接な関わりがあるからです。

移住とは、住む地域を変える「越境」であり、そのことで物語が動き出します。移住者が増えれば「越境」する人も増え、そこからさらにたくさんの物語が新たに生まれてきます。この辺りについて、北川さんからいかがでしょうか。

北川:

物語のフレームワークを重ねてみると、移住と福祉を掛け合わせようとしたとき、私は福祉の分野から移住の分野へと「越境」したわけです。そこで大変な「試練」にも遭いましたが、「習得した秘法」は、みなさんとのこのワークショップの場だと思っています。私もここから学んだものを持って帰って物語を描こうと考えています。

そして「越境」や「移住」については、「何を越えたのか」というのを考えて欲しいと思います。コミュニティや仕事が変わることも「越境」です。また、私は関西出身で、いくつかの地を経て岐阜に住んでいますが、物理的な距離だけでなく、文化の粹組みも「越境」したような感覚があります。他にも、つくってもら側がつくる側になったり、してもら側からする側になることも「越境」です。

「移住」や「越境」といっても、単に場所や空間が変わるだけではなく、色々な多面性があります。その多面性を綴ってみるとというのが物語を書く意味でもあります。

未来は自由に描けますので、色々なものをぜひ自由に越境してもらえたらいいなと思います。

平田:

物語に「越境」を盛り込むヒントとして、例えば、自分が異質の世界へと越境するか、越境して異質の世界にやってきた人を物語のシーンに登場させたり、自分の地域だけではなく、どこかの地域とのかかわりを表現したり、岐阜やいぶき(福祉会)さんとかかわりを表現することを意識するとよいかと思います。

これから物語を書くみなさんに、ここでひとつ私が感銘を受けた言葉を紹介します。それは、「何かに挑むときには「ディナーではなくブレックファストをつくるつもりでやってみる」ということです。

朝食に何時間もかける人はおそらくいませんよね。ぜひ朝飯をつくるようなつもりで、気軽に楽しみながら物語をつくって欲しいと思います。



物語づくりワークのあとは、2人1組に分かれてそれぞれの物語を発表。最後に全員で集まり、数名の物語を共有しました。

## 物語ワークと発表へ

平田:

みなさん戻られましたね。物語を書かれてみていかがでしたか。

牛丸:

書いてみるとやはり難しいですね。まだテーマのイメージがもてていないこともあり、まだ全てのフレームに言葉が入っていない状態です。ただ、物語で未来を描くことには、計画を立てることとは異なる面白さがあると思いました。

平田:

すごく嬉しい感想ですね。  
今回、未来を構想するにあたりみなさんにつくってもらうのは、事業計画ではなく物語なわけですが、物語でプロジェクトをつくと、仮に不足の事態が起きたときにも、それも物語の要素としてとらえることができます。物語はこの点でも、不確定なことが多い現代において有効なんですよ。  
事業計画のようにゴールや目標を決めて逆算するようなものだと、想定外の出来事がひとつでもあったら全体が崩れてしまうことも珍しくありません。

堀部:

私は生協の「くらしたすけあいの会」について書きました。  
きっかけは、知り合いからのある相談を受けてこの会を紹介したのに、会からお手伝いが難しいという回答が届いたこと。  
それなら自分で手伝いをする役割になると「越境」をして、苦手な掃除の手伝いをしたところ、思いのほか喜んでいただけ、「なん

て楽しいのだろう！」と気づきました。  
そうしているうちに需要が増えてコーディネーターになったのですが、やってみると活動会員と利用者のマッチングが難しい。今は「試練」の真っ只中です。  
「秘法習得」にあたるものはなかなか見えてませんが、自分のスタイルで参加できる助け合いができたかと考えています。

平田:

ご自身の「越境」した経験と直面している「試練」が描かれていて、とても豊かな物語になっていたなと思います。  
ぜひ「こういうことをしたら地域がこうなりました」というところまで書き上げてみてほしいですね。

北川:

ご苦勞を含めて目に浮かぶような物語ですね。堀部さんのお話を聞いていて、こんな物語が浮かびました。  
ある日、堀部さんがお茶を飲みながら悩んでいると、その様子をみた喫茶店のマスターが「うちでお茶飲みながら対話する場所を作ってみませんか？お茶飲みコミュニティで考えたらくまいくかもしれませんよ」と声をかけてくれて、ここから物語が始まり、庭づくりなどもスタートする。気がつけば、あちこちでおしゃべりがうまれるような街になったよね、と言われるようになる。そのような物語になっても面白いなと思いました。

平田:

北川さんの話における喫茶店のマスターやお茶飲みコミュニティなどの「秘法」の可能性は、自分が想像している以上にたくさんあるのだということですね。

森田:

一緒にお話をした岡田さんの話が印象的でした。訪問看護をされている岡田さんの物

語は、「国から医療と福祉の連携をいわれているが、現場ではそれができていない」という課題を抱えていて、どう「越境」できるか悩んでいるというもの。

まだどこに「越境」するかも「試練」や「秘法」がどのようなものかもわからないけれど、生活保護や寝たきりの人が、「移住」をきっかけに別の環境で新しい役割を得て、地域で活躍していく。そんな新しい人生のサポートがしたいとお話されていて、素晴らしいなと思いました。

岡田玲子さん(愛知・訪問看護。以下、岡田):

私の職場ではどうしても医療中心になってしまうので、どうしても福祉の役割が必要です。患者さんの満足する地域の過ごし方について、福祉の方に色々な話をうかがいたいと考えています。

平田:

「物語」の観点で話をするならば、「不足」は医療と福祉の連携が職場で足りていないこと。そこから、岡田さんご自身が「福祉」という新しいコミュニティへ「越境」された。

医療と福祉のお互いの理解や制度の違いが乗り越えられるべき「試練」にあたるように思います。

そうした「試練」に向き合うことで、岡田さんにとっての新しい「秘法」を習得し、「帰還」できるのではないのでしょうか。

まずは楽しみながら「秘法習得をすれば、医療の側にも訪問介護の知見が活かせるかも」と考えてみてください。さらにそのことを誰かに共有してみると「だったらこういうことができるのでは」と新たなアイデアが出て、思わぬかたちで物語が動き出すのではないかと思います。

森:

自分自身の物語を考えました。

私は、十六総合研究所というシンクタンクに出向していますが、昨秋までは銀行員をしていました。

仕事が180度変わり、地域経済の研究をすることになり、何をすればいいのかという状態です。

そこで、この十六総研にきたことを「越境」としました。「試練」はまさに今ですね。勉強しながら自治体からお仕事をいただいています。色々と教わりながら、ひとつずつ積み重ねることで、地域のために頑張れるようになりたいと思います。

平田:

どんなことが「秘法」となっていくのか。そしてどこに持ち帰るか。

「帰還」されるなら、おそらくメインのフィールドである銀行ですね。

シンクタンクに出向された経験から、何を「秘法」として習得できるかを想像していただければと思います。

## 物語は伝え合うために書くもの

北川:

ありがとうございました。

今回はチャットではなく、顔をみながらお話できてよかったですね。

物語は書くことそのものも大切ですが、私は、物語は伝え合うために書くものだなと思っています。一人では広げられなかったことが、人とつながることでさらに広がり、豊かになる体験をぜひしていただきたいです。これから、物語を書くことで新たな未来の創造に向かうわけですから、こんなに楽しいワークショップは他にはないのではないのでしょうか。

平田:

いかがでしたでしょうか。

はじめて物語を書いた方は手探りだったと思いますが、3名の方の物語を聞いてみると「こんな風に書けばいいんだ」というイメー

ジが膨らんできたのではないかと思います。  
物語はシェアすることで、自分が思っていなかったような可能性が生まれていきます。  
誰かの物語に自分の物語を重ねることで、物語はより豊かになっていきます。  
それが第3カーブでいう、ひとつひとつの点が結び目をつくって広がっていくということなのだと思えます。  
次回が最終回となりますが、3名1組となって、お互いの物語をつなげていくワークをやっていきます。それにあたり、今回書いたものをブラッシュアップいただき、一旦完成をしていただきたいと思います。  
ぜひ「ディナーではなく、ブレックファスト」の気持ちで、楽しみながらひとつの物語を書き上げましょう。

北川:

今回、おそらくみなさんは、「何をやらされんやろか」「自分でもできるんやろか」とドキドキしながら参加された方が多いと思います。  
ただ、できあがった物語そのものだけでなく、書き上げるプロセスが醍醐味です。ぜひ次回もご参加いただき、そうしたプロセスを含めて物語をお互いにシェアする時間にしていただけたらと思います。

ワークショップ終了後、12月17日までに各自が物語を仕上げて、事務局へ提出しました。



# 6

## 第4回 2020年11月25日(水)

お互いの「物語」を重ねる

### 概要

日時	2020年11月25日(水)19:30-21:00 ※(Zoomによる)オンライン開催
進行	平田直大(沖縄県 一般社団法人しまのわ代表)
スピーカー	北川雄史(岐阜県 社会福祉法人いぶき福祉会専務理事) 森田直広(沖縄県 波と風と合同会社代表)
参加者	22名
ねらい	・書き上げた「物語」をグループにわかれてシェアすることで、 お互いの物語を重ねる。そこから新しい見方や「関係の網の目」を 生み出していく。 ・グループでの対話を踏まえて物語を再構築する。 ・これまでのワークでの変化や感想を共有し、未来構想に生かしていく。

ワークショップも最終回。それぞれが書き上げた物語を持ち寄り、数名のグループで共有します。そこでの対話からどのような新しい可能性が生まれてくるのでしょうか。

### 物語の可能性

平田:

前回、物語の3つの構造を踏まえた上で、物語のフレームワークをつかって物語を書き上げていただきました。

フレームワークの要素のひとつである「越境」というのが、今回のテーマでいう「移住」のようなもの。

誰かが違う土地からやってくることで、物語が生まれる。この「越境」が物語にとって最初のポイントとなっていましたね。

まずは、多くの人にとって物語を書く経験は今回が初めてで、しかも1週間ほどの短い期間で、物語を提出くださったことに感謝して

おります。

物語を拝読しましたが、前回のお話を真正面から受け止めてくださっている方が多く、とても嬉しかったです。

物語を通じてお人柄が見えたようなものが多かったなど。ほとんどの方は、実は直接お会いしたことないのですが、お人柄も物語からにじみ出ていました。

また、みなさんの課題意識やどのようなことを乗り越えられたいかという部分が、物語にすることで如実にあらわれていたのも印象に残っています。

今日のグループセッションでも、それぞれの問題や課題を乗り越えるアイデアを出し合えるグルーピングを考えましたので、楽しみにしてください。

北川:

まず、本当に嬉しかった、というのが正直な感想です。

ここまでみなさんが積極的に取り組んでく



ださることにまずもって感激していました。私自身、物語を思い浮かべるのは好きですが、書くのはハードルが高く、あまり得意ではありません。しかもシェアを前提に書くとなると、勇気のいる部分もあるかと思います。その意味でも、物語を書き上げて、この場にご一緒くださっていることが嬉しいです。私はこのプロジェクトを、物語の構造でいうところの「越境」するワクワクを共有する場にしたい、また、型にはまらない夢のあるものにしたいと考えていました。

そうしたおもいをはるかに超える物語を、みなさん仕上げてくださいました。今日のワークで物語を重ね、さらに新しいことが生まれるだろうと楽しみにしております。

平田:

ここからグループに分かれますが、他の方の物語を自分のものと重ね合わせてみたり、ご自身の物語に、他の方の物語を取り込んでいくということをぜひしてみてください。タイプの違う方が一緒になるようにグループ分けをしていますので、「この部分はどういう考えで書かれたんですか?」「ここが自分にはない視点だった」といったように、対話によって物語を深める時間にしていただければと思います。

北川:

物語のスタイルやボリュームは様々ですが、みなさんエッセンスは魅力的なので、自信をもって臨んでくださいね。

ここからグループにわかれ20分でお互いに物語をシェアしました、その後、15分で自分の物語の再構築をします。

## お互いの物語を共有し、物語を再構築する

平田:

ここからはご自身の物語を再構築する時間

です。

この時間だけではリライトして書き切るまでは難しいと思うんですけど、他の方の物語を聞いて、「この要素は入れられるな」「この人を物語に登場させよう」など、大きな構成の部分を中心に、ブラッシュアップいただきたいなと思います。

音声もミュートに、カメラもオフにさせていただいて結構です。ご自身の物語に向かい合う時間にしていただければと思います。

物語の再構築を終えたみなさんが、カメラと音声をオンにして再び集まります。

## 物語と対話から生まれた、新たな創造と「関係の網の目」

平田:

ありがとうございました。グループセッションでの対話や個人での再構成の時間は、これからの物語の仕上げに生かしていただきたいと思います。

最後に、今できているところまで結構ですので、物語をどのように再構成されたのかということと、これまでのワークショップを通じての感想を、今日はチャットではなくお一人ずつお話いただきたいなと思います。

中川桐子さん(徳島・地域支援。以下、中川):

私は「実家を解体する際の建具や道具類を、どうにか今の生活様式に合わせて再生したい」という「移住×昭和の建具・家具の再生×福祉」の物語を書きました。グループセッションに臨むにあたり「モノログになっているので、家具の一大産地である高山に地域資源を持つ森さんと対話してみても」というアドバイスを事前にいただいています。

グループセッションを受けて、このセッションそのものが「越境」へと変更しました。

一人では具体的にならなかったことが、堀部さんの「とりあえず動く!」というエピソード

ドや、森さんが地域課題に福祉で向き合われている話を聞いて、一気に動き出しました。こうした堀部さんの行動力と森さんの鳥の目に刺激を受け、大きく物語を変えました。おふたりが私にとっては「秘法」です。やはり出会いはすごいですね。

**森:**

(中川)桐子さん、高山でお待ちしています。普段お話することのない方とお話ができる嬉しい機会となりました。堀部さんと桐子さんの「自分の好きなことで地域の方を笑顔にする取り組みを続けられていること」「自分のできる範囲でこまめに期間を決めて行動しつづけること」が特に印象に残りました。グループセッションでは話せなかったんですけど、実は熱気球のパイロットをしていて、先日も高山の限界集落で気球の搭乗体験をしました。こうした地域の人を笑顔にする経験も思った以上に大事だなと、お二人と話していて実感しました。今まではシンクタンクとしての部分しか意識していませんでしたが、こうした部分も福祉やみなさんの活動とリンクさせていきたいです。

**平田:**

この話を聞くと、他の人も自分の物語に森さんを入れたくなっちゃいそうですね。

**堀部:**

本当に楽しい4日間でした。驚いたのですが、森さんがパイロットをされた気球をもしかしたら先日見かけたかもしれません！桐子さんはあたたかなお話で、お話の仕方まであたたかく、建具へのおもいに刺激を受けました。森さんはお若いのに実直で、地域のために役に立とうという姿勢がすごいですね。自分の物語では「越境」部分に、飛騨市で高齢者向けサロンをしている方とのオンライン交流会をあてはめました。その方は底抜けに

明るくて、どんどん人が集まってくるんです。そこから普段ご一緒している(いぶき福祉会の)山本さんの優しい笑顔や、北川さんの豪快で「なんとかなるだろう」という笑顔を思い出しました。明るさや笑顔に人が集まってくるのでしょうか。ありがとうございました。

**平田:**

笑顔は大切ですね。移住事業も無理やり集めて進めても絶対うまくいきませんから。

**山本友美さん(岐阜・デザイナー。以下、山本):**

私は金丸さんと戸上さんのグループでしたが、話を聞いていていろいろ気になるワードが飛び出し、調べたりしていました。私の話は、「障害のある人は、福祉の施設に集まって安全で快適に過ごしているけれど、施設の中で完結していることによって、地域に障害のある人の姿をなくしているんじゃないか」という課題意識からスタートし、地域に飛び出して、こういう風になれば、地域でも安全に過ごせるとみんなに感じてもらえるのでは、という思いを物語にしました。フワッとした思いで書いたのですが、金丸さんがとても具体的に物語を書かれたという話を聞いて、具体性をもっと自分の物語に入れたいと思いました。戸上さんの物語も生き生きとして、具体性は、現場の人との対話から生まれるのだと実感しました。物語をつくることや、グループワークでのつながりをいかして、これからも色々つながってきたいです。

**平田:**

物語の解像度が違うというのも、刺激になりますよね。

**金丸:**

私も、戸上さんの「主人公を自分ではなく、ご一緒している方に設定することで、自分がやりたいことを具体的にかけた」というところが印象に残りました。山本さんのお話されていた「安心する場所」



というのは、私の考える場所とは違いがありますが、「安全な場所」にもいろいろなレイヤーや網の目があることが地域にとって大事だなと思いました。

今回、物語があるからこそ具体的に対話ができたように思いました。

平田さんが、その人らしい物語ができて嬉しかったと言われていましたが、物語と対話を通じて、それぞれのお人柄に刺激を受けながら自分自身も変わっていきける体験ができました。

平田:

自分以外の方を主人公にしていくというのもいいですね。

戸上瑞紀さん(三重・障害者支援。以下、戸上):

物語を書くことで、普段の仕事の中で自分がどんなことを大切にしていきたいかということや、改めると知ることができた良い機会でした。

私は、自分が働いているスイーツ工房の方を主人公にし、工房内で自信をつけて外に飛び出していく物語を書きました。

山本さんの福祉の物語を読んで、まずは安心や快適の枠を作り、その中で安心して経験を重ねてもらうことが大事なんだなというのが気づきでした。

直接的な外とのつながりだけでなく、こうした他の方の考え方や視点を知れたことも、この物語やワークショップでの対話があったからだと思います。

平田:

ここでの気づきや「関係の網の目」のつながりを、ぜひ新しい物語に生かしていただきたい。

金丸さんは、ご自身の物語に戸上さんを盛り込んでくださいましたね。

金丸:

はい。「この物語を戸上さんに読んでもらいたい！」との思いで書きました。

というのも、この物語自体が、戸上さんの物語に感動して生まれたからでした。

北川:

ぜひこうしたことも共有して行ってください！

牛丸:

私は、自分でやっている発達障害児の親の会を立て直し、活発にしたいという思いから物語を書きました。

事前のアドバイスや勝又さんとの話を受けて、自分が何をできるかだけでなく、会の仲間や地域の仲間、移住した方など、他の方の新しい力も上手に取り込んで組み立て直したいと思います。

全体の感想としては、みなさんの顔ぶれをみていて、なんて素晴らしい若い方がいるのか。日本も捨てたものじゃないな、と。

「第3カーブ」や「物語」の理解はこれからですが、みなさんとの対話を通じて、これまで私が漠然ともっていたおもいをみなさんも少なからず共有されていて、こうしたことは間違っていなかった、少しは自信を持っているのかなと思えたのも収穫でした。

平田:

みなさんの力を借りることは大きいですね。「移住」をメインテーマの一つにしているのも、自分や地域だけではできないことも「移住者」という他者が加わることで課題解決に向かえるから。そうした可能性も感じていただけたら嬉しいです。

勝又恵理子さん(千葉。以下、勝又):

事前のアドバイスとグループワークを通じて、私たちのNPO支援の活動が地域から見えにくいことに気づき、地域から見た私たちの位置づけを加えました。

また、牛丸さんとの対話を通じて「福祉の団体は支援されるべき」という地域からのイメージを変えていきたいという話もあったので、福祉の視点から、いぶきの北川さんや

山本さんにもお話を伺いたいなと思います。今回、私は千葉からの参加でしたが、このワークショップに参加すること自体が、千葉から岐阜に移住したような対話の場だったのだなと思いました。ありがとうございました。

平田：

勝又さんはすでに「越境」されたということですね。現実や形にこだわらずにジャンプアップいただきたいと思いました。

瀬瀬：

物語を通じて「一緒に活動をする仲間との共感や喜びの増幅」が私のやりがいと実感しました。

その意味で、仕事は林業でも漁業でもサービス業でもいいのかもしれませんが、やはり福祉が自分に向いているのだなと。

ここ数年は、しなければいけないことばかりに追われ、腰の重さがありました。

こうした自分の気持ちから「越境」をしたいと物語を書きました。

グループワークや他の方の物語を読んで、自分の物語には具体性が足りないと感じたので、固有名詞も入れつつブラッシュアップしていきたいと思います。

「物語」や「第3カーブ」といった、今まで持ち得なかった視点でレクチャーを受けられたことも新鮮でありがたかったです。みなさんとは、Zoom上だけでなく、アナログでもぜひつながりたいですね。

平田：

物語に具体的なことやお名前が入ると、俄然面白くなります。

そこに見知らぬ人が入ると、宮本さんのような物語の自由度につながります。

無理やり見知らぬ人を物語に入れてみることで第3カーブ的に新たな「関係の網の目」が広がるかもしれませんね。

宮本久美子さん(和歌山・障害者支援。以下、宮本)：自分は、県の障害者の作業所を回って手伝う仕事をしています。

今回のワークを通じて、自分自身が物語の中に登場するというよりも、それぞれの作業所がいろいろ挑戦していくことを物語に見立てて、「今『越境』しているで」とか「これが『秘法』やな」などと伝える役割になりたいと思いました。

当事者は、なかなか自分がやっていることを評価することは難しいですから、こうした形で役に立ちたいですね。

平田：

それは素晴らしいと思います。楽しみですね。県内の全ての場所に宮本さんのような方がいたらすごいことになりそうです。

辻本隆太さん(岐阜・障害者支援。以下辻本)：

僕は「コミュニティガーデンプロジェクト」という、コープさんに協力いただいているお庭づくりから派生して「どうぞのイス」という物語を書きました。

これは、コミュニティスペースをオンラインにしたようなイメージで、新型コロナウイルスに限らず、これからの感染症に耐えうるスペースとしてイメージしています。

そうした話を岡田さんや森田さんとかわしてみても感じたのは、まさに「×〇〇」という部分。語り合った人や出会った人の数だけ登場人物が増えていくなど。

早速、僕の物語に岡田さんと森田さんを入れちゃいました(笑)。登場人物が増えていくことでますます対話が生まれ、新たな価値が創造されていく「×〇〇」ってすごいなと思いました。

平田：

これからの展開が楽しみです。

岡田:

私は物語は初めてということもあり堅苦しく考えてしまい、うまく書けなかったのですが、このグループセッションで断片が繋がりました。このセッション自体も物語の一部なのだとわかったんです。

辻本さんの「どうぞのイス」の物語にご一緒に、私は訪問看護という医療の観点で加わりたいなど。

再構成をされていて気づいたのは、ひとりぐらしや核家族が増えていたり、Zoomが使えない老人の方もいれば、誰もがネットが使える環境でもないということ。

そうした方にこそこのイスを利用してもらえれば、横のつながりや輪が生まれ、孤独死も防げるのではと考えました。

Zoomでの勉強会は苦手でしたが、この回まで来て、やっとわかって成長できました。困ったときに助けてくれる仲間と出会えたことが嬉しかったです。

平田:

他の方の物語に乗っかるのも楽しいですね。物語が重なることで新しい「関係の網の目」が生まれてきます。

柴原孝治さん(ガイダンスのゲスト。以下、柴原):

コロナ禍になってから「コミュニティ」とりわけ興味を持っていますが、世界の見方を学び、物語をつくり、グループセッションでシェアをされたみなさんが、今まさにひとつのコミュニティをつくっている様子を垣間見た気がします。

当たり前だと思っていたことや今まで正解だと思っていたのが、もはや成り立たなくなりつつある今、こうしたつながりをもった方々と支え合えるのが大切だと思いました。

この対話型・参加型のワークショップスタイルが、これからの移住事業のメインストリームになるかもしれませんね。

平田:

物語の仕上がりもそうですが、そこまでに至

るプロセスもみなさん素晴らしいですね。

藤井真也さん(岐阜・障害者支援。以下、藤井):

私は途中のワークショップに参加できませんでしたが、みなさんの物語を読み、「みなさんの新事業がすでにできあがっている！」と思いました。

移住×福祉や、Aさん×Bさんといったように、掛け合わせることでいいものが生まれてくる。そうした場面をワークショップの中で何度も目撃しました。これからもこういう機会をきっかけにご一緒できたらと思いました。

平田:

そこがまさに一番のねらいだと思ってまして。つくられている物語が、明日への一歩の道しるべになっているというのが、裏で走っていたテーマだったのでした。

森田:

全体を通じて「言葉や対話の力はすごいな」というのを改めて感じました。ワークショップを経てみなさんの物語がこれからどのようになっていくのかが楽しみです。

私は沖縄在住ということで岐阜からは離れているけれど、みなさんの物語にご一緒していきたいと思います。

松原朋子さん(東京・企画監修。以下、松原):

私は第3カーブの考え方や物語のフレームワークを、いろんな企業や団体に伝え、未来構造のご支援をしています。第2回で、物語のフレームワークで書いていただく前に、3つのビジネス・パラダイムの転換があることをお聞きいただきました。これからの方向性を共有いただいた上で、物語をかけたというところが大きいことなのです。

「造って・売る」の第1カーブの見方では、もはや効果がない時代になってきている中で、みなさんが、個人としてもプロジェクトとしても、第3カーブとして考えていただくことが大切です。その上で物語を描いてくださっているからこそ、よりサステイナブルなもの

になります。改めて「第3カーブの考え方でなんだったかな」と思い返して欲しいと思います。ヒントは「関係の網の目」。「開かれた対話と創造の場」。ぜひみなさんのビジネスに取り入れていただけたらと思います。

**平田:**

松原さんには、このワークショップの企画からご一緒いただいて、ワークショップの元の考え方も学ばせていただきながらこの場をつくっていきました。

一緒に楽しく対話をしながらワークショップをつくっていくプロセス。これこそ物語をつくる醍醐味なのではないかと思います。

**板林淳哉さん(東京・テクニカルサポート。以下、板林):**

私は裏方でテクニカルのお手伝いをさせていただきましたが、**わずか4回のワークショップの中で、これだけで関係の結び目が**できるのに驚きました。

これからさらに広がっていくのが非常に楽しみです。初回とは見違える、今のみなさんの表情が、満足度の高さを何より物語っているのかなと思います。

「エンパワーリング」で社会を変える

**北川:**

これでおしまい、というよりも、これをきっか

けに未来に向かっていきたいと思います。

福祉には「エンパワーメント」という概念があります。それをもっと転がし続けるという意味で「エンパワーリング」という言葉を使っているのですが、これが私の大好きな言葉なんです。今回のワークショップでも、お互いにエンパワーリングしあう姿が嬉しかったです。ここでエンパワーリングできる方は日常でもなさるでしょうし、こうしたことが自然とできるようになると、社会は変わると確信しています。その意味で、このプログラムは「**社会を変えるプログラム**」です。

2週間に1回というタイトなプログラムで大変だったかと思いますが、それ以上の価値を感じていただけていたら嬉しいです。

ここで生まれた「関係の網の目」を大切になさってください。日常的に付き合うことだけが全てはありません。ふとした瞬間にあの人の顔が思い浮かぶ、というのも素敵だと思います。ぜひここをスタートにして、いろいろな形でこれからもご一緒できたらと思います。

平田さんとこのワークショップの形式は続けていきたいと考えています。ありがとうございました。

**平田:**

これまでご一緒くださりありがとうございました。





## 対話から生まれた、未来を構想する物語

ここでは、ワークショップを通じて生まれた7つの物語を紹介します。

誰もがいることができる  
場であるために

金丸泰子さん  
(東京・作業療法士)

コムスイーツ工房奏※でお菓子づくりを始めたAさん。コムスイーツデイで自分の作ったお菓子が売れていく場面を見て、熱い気持ちがわきでてきました。「私のお菓子が人が喜んでくれている！」。職場に慣れて、精神的にも余裕がでてきて新しいことをしたい！という気持ちがでてきました。

奏でのお給料もあり、自分の好きなものにお金を使う事もできます。

ある日、市の広報を眺めていたらタップダンスのワークショップが目にとびこんできました。「やってみたい…」。でも私がそんなところに行っているのかなあ…？

お昼休みに仕事仲間にタップダンスの話をする、開催されるアートセンターではどんな人でも参加できるらしいと教えてくれました。

Aさん、ひとまず、はじめてアートセンターに行ってみました。

アートセンターは緑の芝生にかこまれて、みんなが思い思いに過ごしています。Aさんも座り心地のいい椅子を見つけ、アートセンターで行われているワークショップのブックレットをみってみました。

ブックレットには足のない人や車いすに乗っている人たちが、ダンスのワークショップに参加していたり、目の見えない人がみんなと一緒に

に絵を鑑賞している写真がのっていました。

「私も、タップダンスしたい！」

その場でAさんは受付の方にお話し、申し込みと自分が参加できるか不安に思っていることを伝えました。

受付の人は笑顔で申込のやり方を教えてくれて、後日作業療法士という人から連絡があると教えてくれました。

翌日、作業療法士の人から電話がきて、どんな点に不安があるのか？などいろいろな話をすることができました。ざわざわと不安に思っていたことがとけていき、ワクワク、ドキドキになっていきました。

作業療法士は障がいや病気をもつことで生活しにくくなった方と関わり、その人のしたいことの実現へのお手伝いをしています。その人自身だけでなく、環境やご家族など周りの方に関わることもあります。

多くの方が障がいや病気を持つことで今までの自分との断絶を感じ、そこに大きな苦しみを抱えているように思います。断絶を感じている中、新たな一歩を踏み出すことはたやすいことではありません。中には前に進まざるをえない環境にいて、周りによってつくられた道を歩かされているような人もいます。

閉ざされた環境、関わる人が少なくない時に

は、道がみえなくなり一歩をだす必要性を感じることが少なくなることもあります。それぞれが自分なりの過ごし方ができる。誰でも、障がいをもっていても、いなくても、自分とすることができる。100%でなくても40%そこそこでもOKと思うことができる場所、何をしなくてもいられる場所、そんな場にいたら、もしかしたら、一歩を考えることができるかもしれない。

「誰でもいることができる」、本来のアートセンターはそんな場です。そこに作業療法士がいて、その人がいられるように環境の調整やサポートなど様々な側面から関わる事でそれが成立しています。

誰でもいられる場では、様々な人たちがまじりあい、どんな自分になっても生きていけると思えて進んでいく事ができるようになります。アートセンターがhubとなり、病院や学校へもアートが根をはやし、街全体をつつみ「誰でもみとめられる街」となっていく。そんな場であるアートセンターにAさんは出会い、自分なりのやり方でタップダンスを楽しみはじめました。

タップダンスをはじめたAさんのお菓子には軽やかなおいしさが加わり、奏のお菓子の評判はますます上がっていききました。

※コムスイーツ工房奏 呼夢農場で採れた野菜やくだものと、三重県産の食材を使用したスイーツをつくり販売している。  
特定非営利活動法人呼夢・フレンズ。

2020年12月～未来へ  
ワークショップで生まれた物語と今後の展望

7

## 福祉施設はいらない？

山本友美さん  
(岐阜・いぶき福祉会・デザイナー)

いぶきは障害のある人たちにとって、安心と安全が保障される場所。障害のある人たちのことを大切に考えるスタッフ、その人の個性にあわせてやりがいや成長に繋がるような仕事づくり。そんなものづくりを通して社会との関わりを丁寧に紡いでいる。生活の中でのサポートも適切で、スタッフ全員が状況を共有している。障害のある人にとっても、理解してもらえる人たちのなかで安心して過ごし、いぶきに来るのも好きでいてくれているのではないかと思う。そして、こんないぶきのような福祉施設が各地にたくさんあるんだろう。でも、そんな安全と安心と引き換えに、地域か

ら障害のある人々が生活する姿をなくしてしまっているのも事実だ。自宅から施設までの往復は多くは送迎で完結され、帰宅後や休日は自宅でゆったりと過ごしている人が多い。街に車椅子の人がちゃんといたら、この段差がないほうがいいねとか気づいたり。大きい声を出したり、身体を動かしている人がいたら、障害の特徴も少しは知れるだろう。困っている姿を見たら、力になるにはどうしたらいいのか知りたくなる。歩行が困難な人は道で転ぶかもしれない。そこを通りかかったら自然と『大丈夫ですか』と声をかけるようになれる。

地域にいないから、そんな存在が感じられないから、認めることも関心を持つこともできないのは当然だ。

だから、もう一度施設を飛び出してみよう。スタッフはつなぐ人。地元のいろいろな場所について、地域の一員として過ごそう。困りごととはどんどん周りに伝えよう。そして助け合える関係を繋いだり、居場所をつくろう。

こんなことを同じように大切に考える人がいた。ある時、好きな時に行けるいろんな表現活動が誰でもできる場所ができた。

つくったり、見たり、きいたり、さわったり、うごいたり、表現をしてもしなくても、一緒にできることを楽しんだり、ひとりでたんとと作業したり。空間をゆるく共有しながら、やれることがある。そして、ここには頼れる作業療法士の存在がある。広くゆるやかな空間だと、不安になるひとや、道具の性質上できないものを理解し、上手に促してくれる。壁に囲われた空間に導くことで自分が出せる人でも、そうした理解者の手助けによって、社会の中で豊かな気持ちを育むことができる。

自分が表現できる場所、理解される関係がある

と、少しずつそうでない場所に歩みを進めることができるようになるのではないかな。

理解されないために傷ついたり、失敗することも沢山おきる。でも、それこそが地域や人々の気持ちを変えるチャンスになる。

街がもっと、安全になって誰にとっても過ごしやすい場所になっていく。

あちこちに気軽に立ち寄れるお助けスポットもできるといい。

そして、彼らを必要としてくれるような仕組みや、アイデアも生まれていく。

「うちのお庭のお手入れを手伝って」とか、「車椅子でランニングイベントの撮影係をやってくれない？」など。

支援者も孤立しないように、IoTや様々なツールを活用していろんな情報や仕組みと連携して、もっと広く助け合おう。

こうして、新しい福祉のありようができる。

そして、お気に入りの場所、会いたくなる人、自然や動物に癒されたり、時の流れを感じよう。

いまは会えていない街にいるはずの多様な人々が、おおらかな場のなかで互いに存在を感じながら、ゆるやかに繋がれる社会を夢見て。

2020年12月～未来へ  
ワークショップで生まれた物語と今後の展望

7

## 福祉団体から地域づくり

勝又恵理子さん  
(千葉・NPO支援)

(私の所属する団体が市から受託している)みんなで地域づくりセンターでは、これまで市民の方の情報交換などの場を通して、コミュニティレストラン、地産地消のグルメづくり、福祉施設紹介・販売フェアなど、小さな資源を生

じつみ出してきました。最近は、子ども支援、災害支援ネットワーク、まちづくりとアートなどのテーマで地域づくりの芽や種が生まれています。しかし、それぞれがまだ弱く地域の人にも見えにくいので、これらを結び、網の目をつ

くって地域を支えられるようにしていきたい  
と思います。

そして、そのひとつの方法として「福祉団体から地域づくりを進められるのではないかと考えました。

例年行っている「ユニバーサル農業フェスタ」がコロナで開催が危ぶまれる中、福祉団体のメンバーに声を掛けて実行委員会が立ち上がり、「農業の大切さを伝え、福祉団体の活動と製品を知ってもらおう」と準備を始めました。

ところが、開催までには、思っていたより多くの試練がありました。安全を考え「屋外、販売のみ(飲食なし)」のイベントとしても、できるだけ予防対策を取った方がよい、検温や記名の場が密にならないか、更に感染状況が厳しくなり、本当に開催するのかという心配が寄せられるなど、開催間近まで何度も判断を迫られ、それでも、感染リスクが高まる場面に当たらないことを確認して開催を決めました。その後も前日80%雨予報、「少雨決行」で開催した当日は、朝から小雨が降り続けました。

コロナでどこも大変ですが、このフェスタにもこんなに試練あって、それだからこそ得られたものは何でしょう？

実行委員会で悩みながらも、決断し開催できたこと。そして天気に関わらずたくさんのお客さんが来たこと。

出展者からは「いいつながりをありがとう」「いろいろな点と点がつながりうれしい一日でした」「福祉関係や農業生産者と知り合うことができました」「今年度初めてのイベント販売で活気づきました」などの声。

それで気づいたことは、趣旨にもうたっているとおり、フェスタが「出会いの場」だったこと。「福祉団体から地域づくりを進めるために、フェスタ前に考えていた販売の回数を増やすことより、つながりを育てること、新しいつながりをつくるのが大切だということ。

すでに、福祉団体が他の団体とつながって新しい取り組みを始めているところもあります。子

ども支援のイベントでお菓子を販売し「来る楽しさが増えました」と言われたり、コミュニティレストランの外回りのお掃除ボランティアをして喜ばれたり。こういうことが増えていったらいい。一方、福祉団体が他の団体と出会い混ざって活動する時、一部の「福祉の活動だから支援されるべき」という考えや、地域の人からの「支援される一方の団体」という見方も変わってほしい。

そこで、福祉の団体からもっと地域の他の団体と出会うつながりをつくれるように、いぶき福祉会さんの力をお借りします。

フェスタを開催して、また何かやりたいねと思っている今、実行委員メンバーからも少し広げて勉強会を開き、北川さんに、いぶきの“Happy-Happy Partnership Map”のこと、地域の様々な人や団体との出合いや、そこから取り組みにまで育て、網の目をつくってこられたことなどについてお話を伺います。

また、思いの込められた製品や企画を伝えるためのデザインについて、山本さんからもお話を伺います。オンラインでも、商品をいろいろお取り寄せして実際に手元で見て触れながら、商品の工夫やパッケージ、広報などについて考えられたら素敵です。

先日、クラフト手芸をする団体が、「お菓子販売用のかごの注文を受けたことから新しい商品が生まれたのです」と喜んでいたように、小さいことでよいので、福祉団体×〇〇を実現させていきます。そこから、福祉団体が、地域で他の団体と一緒に新しい取り組みができるようになります。

他の団体も、「今度何か一緒にやりましょう」と互いにつながりを見つけて『福祉×子ども、×災害支援、×アート、×農業・里山保全、〇〇×〇〇』というように、おもしろい取り組みがあちこちに生まれて、みんなで地域を支える力が育って広がっていきます。



## これからの私

森俊介さん  
(岐阜・金融)

思えば、私は学生時代から何不自由なく生活してきました。温かい家族や友人たちに囲まれて。恵まれた環境下で生活できることに感謝する一方で、「良い」高校、「良い」大学に入れば、これからの人生も何不自由なく生きられると思って、自分のやりたいことは何なのか、自分は何が社会に還元できるのかを全く考えてきませんでした。いわば、「草舟に流されるよう」に生きてきたのかもしれませんが。それこそが私が以前から感じていた「将来に対する漠然とした不安」だったのかもしれませんが。

そんな思いが、はっきりしたのが、2019年10月に人事異動で十六総合研究所に配属になってからです。

日本には課題が山積しています。特に私が赴任した飛騨は「課題先進地」と呼ばれ、高齢化率、人口減少がいち早く進む地域です。会社では、その課題に対して、どんな提案ができるか、「自ら」考え、行動する主体性が必要とされています。これまでの銀行員生活のプロダクトアウト的な考え方ではなく、地域に真に必要なものは何かを考えるマーケットインの考え方、多様な関係者がつながる社会でどのようなものを生み出すことができるかが問われます。自ら考える力が欠乏している私にとって、非常に重い課題を突き付けられ、瞬く間に時間は過ぎ、飛騨に赴任してきて1年がたちました。

「自分には何ができるのか…。」自問自答の日々が続いています。私には何ができるかを考えました。飛騨に赴任して1年、様々な地域コミュニティの場やワークショップに参加しました。まだ若いからこそできる挑戦、行動力、失敗できること…。これが自分の強みなのではないかと

気づき始めました。先日参加した、いぶき福祉会さんが開く「福祉×〇〇×移住2020ワークショップ」もそのうちのひとつです。グループワークでは堀部さんと中川さんと一緒にいろんな話をしました。おふたりの話を聞いていると、「こまめに目標を決めて、その成功を繰り返すこと。」「自分の好きなことで地域の方の笑顔につながるか考えること。」「いろんな方と出会い、刺激を受け、また一緒になって取り組むこと。」「まずは自分が笑顔で取り組むこと。」これらの点が大切であると気づき、自分も心がけていきたいと思いました。

話は変わりますが、私は趣味で熱気球をしています。この2年間、熱気球のパイロットになるために、かなりの時間を費やし、2020年3月に熱気球パイロットになることができました。

気球は風任せの乗り物で、気まぐれに変わる風が相手です。着陸する場所も決まっていないので、刻一刻と変わる風に対して、上空での状況判断が問われます。自分で判断をしないとイケません。そしてフライトの全責任はパイロットにあります。これらは、まさに今まで自分が避けてきたものです。主体性、責任感などはあまり負わないように過ごしてきました。その点で、「今、自分自身が成長できる場にある」と実感しています。

また、フライトプラン(どうやって飛んで、どこに降りるか)は絶対的な正解もなく、そして正解は複数あることも多いです。これはまさに地域の課題と同様であると感じています。課題解決の正解はなく、皆が正解を模索している状況です。正解のない問題に挑むのは根気が必要です。正直、途中で投げ出したいなと思うことはあります。ただ、ここは辛抱して、いろんな経験

を積んで、頑張りたいなと心から思います。

そして数年後…。

ワークショップで出会った堀部さんとは今もお付き合いが続いています。地域のコミュニティを醸成するうえで欠かせない有償ボランティアについて、いつもアドバイスをもらい、私も本巣市にお伺いしながら金融機関としての関わり方を一緒に考えるなどして、協力し合っています。

中川さんとも徳島とオンラインでつなぎながら、家具の再生について議論しています。先日高山の家具メーカーをアテンドし、新商品開発の打ち合わせをしたところです。

まだまだ勉強の毎日ですが、飛騨での私の居場所も徐々に見つかってきた気がします。

「この数年間、行動して、主体的に動いて本当に良かった。」そんな気持ちでいっぱいです。

熱気球の活動もちろん続けています。パイ

ロットとして、地方の大会に参加できるようになりました。こちら訓練の日々が続きますが、プライベートの充実も実感する日々です。また、自分の好きなことで地域の方を笑顔にできないかということで、先日、地域の方々向けに気球の体験搭乗を開催しました。気球に乗った地域の方々の笑顔を見て、ここにも自分の居場所ができたかなと嬉しくなりました。

まだまだ、私の物語は続いていきます。これからも数々の試練が待ち受けていると思います。ただ、このワークショップで自分のある種の「柱」(信念)が築けたのではないかなと感じています。この「柱」を忘れずにいれば、きっとどんな試練も乗り越えられると信じています。最後になりましたが、この度は貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。皆様に成長した姿を見せられるように、まずは、今自分が対峙する試練に向かいます！

### 若者と介護福祉

団塊の世代が75歳以上となる2025年には、日本の高齢化率は30%を超える。私が在住する飛騨地方はこれよりも早く高齢化が進んでおり、諸問題に対応するためには若者の力が必要だ、とどの場でも議論になる。私が20年度に携わっている介護福祉の分野でも同様だ。

若者と介護福祉一。コロナ禍であっても有効求人倍率が約4倍となっている介護関係職種に若い力を集めるにはどうしたらいいか。それは介護を「高齢者のお世話をする仕事」と捉えるのではなく、「地域を担

い、地域を創る仕事」と捉えることにあると考える。

農業や商品開発などさまざまな取り組みを地元業者と連携し、利用者、職員とともに行っている社会福祉法人がある。ほかにも全国の事例を調べていると、地域に開きながら、地域(住民)と対話し、事業に取り組んでいるところに若い人材が集まっていることが分かった。

介護福祉を起点に、業種などの壁を越えた事業を通じて、地域を創る。若者が介護福祉に関わりたいと思うヒントはここにあるのではないだろうか。

(十六総合研究所研究員 森俊介)



◀2021年1月27日中日新聞より

2020年12月～未来へ

ワークショップで生まれた物語と今後の展望

7

### トモコの物語

堀部智子さん  
(岐阜・生活協同組合)

私は岐阜県本巣市に住んでいる普通の主婦。新しいことが大好きで誘われたら大抵どんなと

ころでも顔を出してみる。水道検針やメディカルアロマの啓蒙活動、そして生協の組合員理事

と生協組合員による『くらしたすけあいの会』での有償ボランティアをしながら日々忙しく過ごしている。

有償ボランティアを始めたきっかけは、市のまちづくりに関する話し合いに参加させていただく機会が増えたこと。そこで介護保険を使うほどではないけどちょっと助けて欲しい人がいるという声を聞き、生協の『くらしたすけあいの会』を紹介した。しかし後日「本巢市には活動会員さんがいないのでお受けできません、って言われました。」と聞き、申し訳ない気持ちになった。私自身が会のことをよく知らずに丸投げしてしまったことを反省し、次からはこんなことにならないようにとまずは自分が活動会員になってみた。

しばらくして子育てママさん宅のお掃除の依頼が入った。「掃除、苦手なので…」とお断りしたが「大丈夫、大丈夫」とおだてられドキドキの初活動。お祖母ちゃんのお部屋が少し散らかっている以外はとってもきれいなお家で、掃除をしながら整理整頓のコツを学ぶことができそのうえ感謝していただけるという、一粒で何度も美味しい経験だった。利用者さんとの出会いやおしゃべりも楽しく、自分にすごく向いているなあと感じながらその後も活動を続けていた。

やがてケアマネージャーさんから依頼をいただき、コーディネーターとしての初仕事をするようになった。先輩コーディネーターさんに同行してもらってなんとか新しい一歩を踏み出した。しかし、元々活動会員のいなかったこの地域では人材探しが一番の問題。活動を広げたいけど今の人数でこれ以上依頼が来たらとても受けることが出来ない、どうしよう…と大きな壁が私の前に立ち上がった。

そんな時、徳島に住むキリコさんから、以前から計画していたIoT家具が完成したよ、と連絡

があった。早速Zoomでお披露目会。その家具はキリコさんのお祖母ちゃんが使っていた家具を、ぬくもりはそのままに現代の技術を融合させたヘルシーチェック機能付きの化粧台だった。その化粧台を作るためにキリコさんは地域の人たちにたくさん発信をしたそうだ。「私、こんなこと考えてるの。何かアイデアないかな？」するとたくさんの人たちがキリコさんの周りに集まってきて、今では次なるIoT家具の作成に取り組むチームが出来ているそうだ。

その話を聞いて「私もとりあえず動かなきゃ！」と一念発起。飛騨の森さんが住んでいるサテライトオフィスを思い出し、母屋で何か出来るんじゃないかと思った。夫の両親の介護を覚悟していたが2人とも他界してしまった今、近所の人が集まる居場所づくりがしたいなと漠然と思っていたこともあり、古いところを売りにインテリアを古民家風にしてみた。これはいぶきの敏腕デザイナー山本さんの協力なしでは考えられないことだった。試しにアロマクリームの手作り体験付き『くらしたすけあいの会』のお知らせ会を定期的で開催してみた。初めは一人、二人とポツポツと訪れるだけだったが、そのうち人が人を呼びお年寄りからこどもたちまで、たくさんの方が遊びに来てくれるようになった。すると「こども連れでもできますか？」「私、こんなこと困ってるんだわ。」「後期高齢者だけどまだまだ元気やよ！」「近所に困ってる人いるけど話聞いてあげて」「あの子、そういうこと好きそうやわ」など、たくさんの方が出てきた。ほどなくわが家が「くらしたすけあいの会もとす」の事務所も兼ねることになりわが町でのたすけあいの輪がどんどん広がっていった。

こどもも大人も高齢者も障がいのある方も、みんながお互いを尊重し助け合える優しい人と笑顔があふれるわが町、本巢。私の自慢である。



移住×〇〇×福祉から始まる  
「温かい対話をするIoT家具」をつくろう 2021年の桐子の物語

中川桐子さん  
(徳島・地域支援)

出発 2021年 早春。

やっと母屋から切り離れた離れにドアがつき、中に入れるようになった。地元の後輩の大工の武ちゃんが作業してくれて、チェーン店より安価に、行き届いた造作ができて、ほっとした。この場所をみんなが集まれる空き地的空間にして、いつか桐子の住処になるようにしたいと考えていた。桐子は昨年秋、移住×〇〇×福祉のオンラインミーティングに参加して、はぐくんできた物語りに向き合った。そろそろ春の目覚めのころだ、と、桐子は思った。

越境 2021年 春。

離れに桐子の友人たちを招待して、IoT家具のプロジェクトについて語り合う会を開催した。木工の川田君、インテリアのヨッシー、パソコンの家庭教師の理恵ちゃんが来てくれた。オンラインで、星野社長や松原さん竹内さんが参加してくれた。桐子は「移住×〇〇×福祉」での話から切り出した。地方の古民家に眠っている家具や建具を、新しい技術とデザインで、人と対話するIoT家具を作るビジネスモデルを作ることで社会課題のごみ問題や資源問題の軽減や、エシカル消費への取り組みになると語った。

試練1 話を聞いた川田君が、具体的なイメージがわからなくて、質問攻めにしてきた。彼は生家が建具など制作する木工所で、のちアイリスオーヤマの木工の部門を担当し、東京、大連などで仕事をし、地元に戻り、フリーランスで仕事をしている。このプロジェクトに必要な人だと思ったが、なかなか伝わらない。ある意味、尤もだが、身近で一番理解してくれそうな人を選んだから、きっと突破口はあると思った。

試練2 ヨッシーは、感性豊かで、インターミディエーターの説明会も参加したことがあるので、川田君ほどツッコミは入れてこないが、僕は何をしたらよいのだろうか？と、桐子に問いかけた。何をするのかを、考えながら、どんなことができるのかをアイデアを膨らませたいと伝えたが、話が続かなかった。

秘法の取得 そこまで話を聞いていた松原さんは、最初にIoT家具の物語りを作ってくくださったポイントを岐阜のお話と絡めて語ってくださった。そして星野社長が、最新の技術のことや、新しいビジネスモデルのことを例に出し、阿南高専のことを語ってくださった。川田君は、星野社長や松原さんと対話をしながら、自分の中に何か一つのイメージを作りかけているのがわかった。ヨッシーはその話をにこにこ聞きながら、前に会ったことのある竹内さんに高専のことなどを聞いている。チャーターメンバーは、考え方が似通っている人たちから始めるべきだと思っているが、最初の調整は複数のインターミディエーターの方たちがいるとスムーズに進むと実感した。スタートラインに立てたような気がした。

帰還 オンラインミーティングの後、桐子は「障子紙張り替えワークショップ」や「流木磨きワークショップ」「掛け軸張替えワークショップ」など無茶苦茶な提案をして、彼らを困らせたが、「自分もしくは未来の自分にあればいい機能付き家具」について課題を共有して解散した。次回はいぶきの北川さんとオンラインでお話会をして、結び目を増やしたいと思った。



物語

戸上瑞紀さん  
(三重・障害者支援)

障害者就労継続支援B型事業所コムスイーツ工房奏に父親と一緒に見学の方がみえた。40歳女性。付き加減な彼女。父親は娘の方に目を向けながら話す。高校卒業後20年間引きこもりだったらしい。母親は他界。社会経験が乏しいので、自分で生活できる力をつけてほしい。

彼女は初めて工房に出勤した日に「私今日から社会人になります」とうれしそうに言った。彼女にとって、奏での活動は初めての社会の場。緊張している様子がかがえた。

休憩してきてくださいとお伝えした後「休憩はどうすればよいのですか?」と聞いてきた。草引きをすると、「こんなことは初めて」と言った。バスでの通勤も、職場での仕事も、お昼休み後のお茶の時間も、納品も販売も…彼女にとって初めてのことばかり。

スノーボールクッキー作りが得意。きれいな丸にするのが難しい。ゆっくり丁寧にのひらで丸めていく。手を開くとつるつるつやつやの丸いクッキーが現れた。自慢げに見えた。日に日にできることが増えていく。新しいことに触れていく毎日はどんなだろうと想像した。初めてのワクワクを楽しみながらどんどん新しい経験をしてほしいと思った。

時には私にはできませんということもあった。ぶつぶつ文句を言いながらの作業もあった。そんな時は周りの仲間が自然に、あまりにも自然に、励ましていた。ふと気付くとぶつぶつ言わなくなっていたり、できるようになっていたりした。

月に一度のコムスイーツデイ。自分の作ったお菓子が売れていく。自分の手で自分の作ったお菓子を両手を添えてお客様に渡す。

「ありがとう」

「ありがとうございました」

表情の乏しかった彼女が笑っている。

お菓子たちは工房から外に飛び出す機会や勇気をくれる。

そんな機会をたくさん作っていきたい。

障がいがあってもなくても自分としてのことのできる場所を感じてほしい。

他人のことを思いやるのが苦手な人もいる。周りのことばかり気にしてしまう人もいる。気を遣いすぎて自分が疲れてしまう人もいる。

まずは小さな守られた環境の中で、人との関わり方に少しずつ慣れていくことができればいいと思っている。失敗しても、どうして私はこうなるんでしょうと悩んでいる人も、わかっているけどできない人も。

誰もがいろいろなことを抱えて生きている。何もない人なんていないんだよ。

誰もがどこかで誰かの、何かの役にたっているんだよ。

そんなメッセージを抱えて接している。

今日はどんな一日が待っているのかな。

お菓子作りを通じて生まれる出会いやつながりを大切に、みんなの心の動きにおおらかに寄り添っていきたい。

# ワークショップの終わりから、新たな物語の始まりへ (あとがきに代えて)

2021年1月下旬、北川さんと平田さんでワークショップについて振り返りました。

**平田:**

ワークショップおつかれさまでした。楽しかったですね。北川さんは2018年から「福祉×移住」の事業を続けてきていますが、今年のワークショップにける想いにはどのようなものがありましたか？

**北川:**

以前の事業では、「福祉」という枠から出てこなかったという葛藤がありました。ですから今回は、「関係の網の目」を福祉以外の方とも結びたいという気持ちがとても強かったです。福祉の枠を越えるとは、まさに「越境」ですね。

**平田:**

過去の事業でも、北川さんにお声掛けいただき一緒にしましたが、今回のワークショップを終えた今から振り返ると、参加する方との対話が少なく、参加者のバックグラウンドや参加動機がつかみにくい印象がありました。

その点、今回のオンライン形式のワークショップでは、開始前に声をかけたり、毎回チャットで感想を交わすなど、参加型・対話型の構成に工夫したこともあり、みなさんの表情や課題意識なども感じながら進められたのもよかったですね。

**北川:**

回を重ねるごとにみなさんの表情もやわらかくなっていましたよね。

ワークショップの最終回で柴原さんが「これからはこのスタイルが移住事業のメインストリームになるのでは」とおっしゃっていただきましたが、やはり平田さんが対話的に場の進行を引き受けてくださっている安心感が大きかったです。

みなさんが書き上げた物語について、物語のフレームワークに重ね合わせつつ、新たな可能性を平田さんが引き出していく。このワークショップのあり方そのものが、参加者がご自身や地域の課題解決のために異質の世界へ「越境」していく物語のようであり、ワークショップ中も、それまで想像もできなかった「関係の網の目」が次々に結ばれていきましたね。

**平田:**

このような形で北川さんと一緒にするのは初めてでしたが、このスタイルに可能性を感じましたし、一対一で対話できる今回のような場であれば、それぞれの「関係の網の目」を結びながら進行していけるという確信ももてました。

**北川:**

平田さんとのこのスタイルはぜひこれからも続けましょう。

**平田:**

ぜひぜひ。「関係の網の目」といえば、最後のワークショップでの、お互いの物語を重ね合わせるセッションのグループづくりも、いろいろ考えましたね。

北川さんと松原さんと平田の3名で、参加者が書き上げてくださった物語や、その方のお住まいやお仕事なども考慮して決めました。

**北川:**

基本的に「この人とこの人」という結び目をまず考えましたよね。掛け合うことで面白くなったり、対話することでお互いがエンパワリングできるような、そんな組み合わせにしたいという思いでグループを考えました。

**平田:**

ワークショップの最終回から少し時間が経ちましたが、その後、参加者から何か新しい動きはありましたか？

**北川:**

まず、今回と同じようなワークショップをやりたいという話がありました。

また、「福祉×若者」という切り口で、福祉を起点とし業種などの事業を超えた事業づくりに取り組まれようとする方も出てきています。他にも「この人と一緒に取り組みたい」と物語で書いたことが実現し、実際にお話をされたりと、新たな「関係の網の目」が各地で結ばれているという話を、あちこちで聞いています。

**平田:**

物語は未来の構想を描くためのものですから、参加してくださった方が、未来にむけて実際に動き出されていると聞けて、とても嬉しいです。これからもみなさんの物語や場づくりを応援したいと思います！

**北川:**

このワークショップは、つくりあげた物語が県の移住事業としてプロジェクト化していくことを想定してもともと始めていますが、県の事業という枠組みにとらわれず、このワークショップが未来の事業化のきっかけとなれば嬉しいです。今回のワークショップ自体は一区切りですが、「福祉×〇〇×移住」プロジェクトはこれからも続きます。

ご関心をもたれましたらぜひお気軽にご連絡ください。これからもみなさんと一緒にできることを楽しみにしています。

## 福祉×移住による地域課題の解決につなげるネットワーク事業2020

---

発行：2021年1月

### 《事務局》

事業責任者：社会福祉法人いぶき福祉会法人本部 北川雄史

編集・デザイン：いぶきデザイン室 山本友美

### 《協力》

企画運営：一般社団法人しまのわ 平田直大

運営：風と波と合同会社 森田直広

オンラインコミュニティ運営：株式会社ダंकソフト 星野晃一郎・板林淳哉

企画・監修・講座資料提供：設楽剛事務所株式会社 松原朋子

レポート作成：上杉公志